

はですがたおんなまいぎぬ 艷容女舞衣

〔解 説〕安永元年（一七七二）大坂豊竹座初演。作者は竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民平七。美しい人情を描いた世話物の代表作です。中でもお園のクドキ「今頃は半七様どこにどうしてござろうぞ」はよく知られています。元禄八年、大阪千日前での赤根屋（茜屋）の半七と美濃屋の三勝（さんかづ）が心中した事件が歌舞伎となり、二十五年を経た享保四年、紀海音が『笠屋三勝廿五年忌』という浄瑠璃を創作しました。その後更に笠屋を実説美濃屋にし、半兵衛やお園を配した『女舞剣紅楓』の筋を受け、発展させたものがこの作品です。上中下三巻に分かれ、下の巻の、「上塩町の段」が「酒屋の段」となります。

〔あらすじ〕大阪上塩町の酒屋「茜屋」に幼子を連れた女が酒を買いにあらわれ、子どもをおいて姿を消します。この店の息子半七は、お園という貞淑な女房がいるものの、以前から美濃屋の三勝という遊女となじみ、二人にはお通という子どももありました。半七はふとした廓のいきさつで、人殺しの科人となってしまいます。半七の父半兵衛は、一度は息子を勤当したものの、不憫に思い、代官所で息子の罪を引き受けて縄にかかります。一方、お園の父宗岸は、半七の不行跡に愛想をつかし、一旦はお園を実家へ連れ戻したものの、お園が悲しみに沈んでばかりいるので、再び嫁として迎えてくれるように半兵衛に頼みに来ます。お園は夫に嫌われるのは己の至らなさからと、ひとり寂しく半七の身を案じます。

酒屋の段

跡には園が憂き思ひ。か、れとてしも烏羽玉うばたまの、

世の味気なき身一つに、結ぼれ解けぬ片糸の、繰返

したる独り言

「今頃は半七様、どこにどうしてござらうぞ。今更

返らぬことながら、私わしといふ者ないならば、舅御様

もお通つうに免じ、子までなしたる三勝殿を、とくにも

呼び入れさしやんしたら、半七様の身持も直り御勘

当もあるまいに、思へば／＼この園が、去年の秋の

煩わづらひに、いつそ死んでしまふたら、かうした難儀

は出来まいもの。お氣に入らぬと知りながら、未練

な私が輪廻ゆゑ。添ひ伏しは叶はずとも、お傍そばにあ

たいと辛抱して、これまでゐたのがお身の仇あだ。今の

思ひにくらぶれば、一年前にこの園が死ぬる心が

エ、マつかなんだ。堪へてたべ半七様、私やこのや

うに思ふてゐる」

と恨みつらみは露ほども、夫を思ふ真実心なほいや

増さる憂き思ひ。

「明日はとほから父様に、また連れられて天満へ去

に、半七様のひよつとした、はかない便りを聞くな

らば、思ひ死にに死ぬである。とても浮世は立たぬ

覚悟、嫌われても夫の内、この家で死ぬば後の世の、

もしや契りの綱にも」

と最期を急ぐ心根は、余所の見る目もいぢらし。

かゝる哀れも知らぬ子の、泣き声に目や覚しけん、

一間を出でて

「乳飲まう。乳が飲みたいおぼ／＼」

とお園が膝に寄り添ふ子の、顔見てびつくり

「ヤそなたは美濃屋のお通ぢやないか。こゝへはど
うしておぢやつた」

と不思議ながらも抱き上ぐれば、半兵衛、宗岸、母
親も、一間のうちを転び出で、

「ア、コレ／＼嫁女、かたじけな忝いその心。障子のうち

で聞きたびに、拜んでばかりゐたわいの。礼云ふ
こともたんとあれど、心のせくはこの子のこと。美

濃屋のお通と言はしやつたは、半七と三勝の」

「アイ、お二人の中に出来た、お通といふはこの子
ぢやわいな」

「ヤア／＼親父殿。聞かしやつたか」

「ヲ、聞いてゐる。がそのまたお通を、なんで捨て
子にしてこちのうちへ越したぞ。コリヤ訳があらう。

かか嬢、懐かどこぞになんぞカウ書いたものでもないか、
はやう尋ねて見や」

と云ふうちに、わくせき明ける守り袋、うちよりば
らりと落ちたる一通。取る間遅しと封押切り

「ヤ何ぢや。書置のここと書いてある」

「ヤア／＼コレ／＼嫁女。そなたのよい目でちやつ
と読みや／＼」

「アイ／＼ナニ／＼『とたび十度契りて親子となる。父の
御恩は山よりも高きとの世の教へ、わが身にも弁

へをり候へども、その御恩も得送らず、儘まならぬ義

理にからまれて、心にもあらぬ不孝の罪、御赦し下
されたく候。わけて母様の御養育』ア、コレ申しお

前様のことでござります。ようお聞きなされませえ」

「ヲ、よう聞いてゐます、よう聞いてゐますわいな
う」

へ聞いてゐるさの障子より、洩れ出づる月は冴ゆれ
ど胸の闇

「エ、時も時と隣の稽古。そしてそのあとはなんと書いてあるぞ」

「アイ』わけて母様の御養育、海より深き御恵み、親父様の御機嫌悪い時には、蔭になり日なたになり幾千万のお心遣ひも、泡と消えゆくわが難儀。人を殺せし身となり候へば、思ひもうけぬ御別れ』
エ、そんならやつぱり半七様は」

「オイナウ嫁女。善右衛門を殺しました、善右衛門を殺しましたわいなう」

「ハア」

「あの善右衛門といふ奴は、大抵や大かたの悪い奴ぢやないわいの。あんな悪者でも喧嘩両成敗。わが子の命を解死人にとらるゝと、思へば／＼宗岸殿。おりや口惜しい、口惜しいわいの」

へおし鴛鴦の片羽のとぼ／＼と、子に迷ひゆく小夜千鳥

むざんやな半七は、今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしを／＼と、心にかかるわが子の顔、名残りにせめて今一目と、ともに戸口に夜の鶴。

こなたはお園がなほ涙。泣く／＼取上げ書置を読むもはかなき世の中の

「エ、』女はその家に在りて、定まる夫一人を頼みに思ふ者に候ところ、その頼みに思ふわれ等が身持いつしか愛想らしき詞もかけず、ついに一度の添い伏しもなく候へども、その色目もいたさずして、夫大事、親たち大事と、辛抱に辛抱なされ候段、山々嬉しく存じまゐらせ候。エ、今まですげなう致せしことも、さら／＼嫌ふではなく候へども、三勝とはそもじの見えぬ先からの馴染みにて、子まで設けし仲に候へば、互ひに退き去りもなり難く、それゆゑ疎遠にうち過ぎまゐらせ候。しかし夫婦は二世と申

すことも候へば、未来は必ず夫婦にて候。』ヲ、コ
リヤマア誠かいなあ半七様。ほんまのことでござん
すかいな」

「コリヤ娘。未来は夫婦と書いてあるかい」

「アイナア、未来は夫婦、と書いてござんす」

「ヲ、それはマア、われが為にいつち良いことが書
いてあるなあ。ア、未来は未来ぢやが、せめて一日
なりとこの世で女夫にしてやりたい。なんとしても
マアこの半七は善右衛門を殺しましたぞ。ドレ／＼
娘。もちつとぢや。おれが代つて読みませうかい」

「イエ／＼私に読まして下さんせ」

「ハテさて、おれが代わつて読ませと云うに」

「イエ／＼私が読まして下さんせ」

「これはしたり片意地な。こつちへおこせと云うに」

「イエ／＼、私が読みますわいなあ」

「ア、これいなう、コレ、そのやうに引張ると破れ
るがな。エ、』とかく不孝のわれ等に候へども、死
後にはさぞやお二人や、宗岸様の御歎き、随分々々
力をつけ、この身に代つて御孝行になされ給はるべ
く候。申残したき事どもは数々に候へども、涙に字
性しやうも見へがたく、あら／＼惜しき筆とめ申し候、
ただ／＼お通が事のみ頼み上げ候。この上はなから
ぬ後のお念仏、南無阿弥陀仏』、南無阿弥陀仏／＼

と読みも終らず宗岸親子。また伏し沈めば、半兵衛
夫婦、お通を中に抱き上げ

「初孫ういまたの顔が見たいと心に思へど世間の義理で、こ
れまで逢ひも見もせなんだ。かういふことと知つた
らば、顔見ぬうちがましであつたナウ婆」

「ヲイナウ愛らし盛りのこのお通、半七といつしよ

に暮らすなら、よい楽しみであらうもの」

「コレ婆、見やいのく、なんにも知らず坊主めが、手打ちやあばどばつかりしてをるがなあ」

「オイノウこりや孫よ。もう父も母もないほどに今夜からこの婆といつしよに寝いよ。ア、とはいふもの、乳もなく、今から先の寝起きにも、さぞや歎かんな親々が、知らずにゐるが胴欲者。むごい心いぢらしや」

と云ふ声洩るゝ。三勝が、思はず乳房を握り締め

「乳はここにあるものを、飲ましてやりたい、顔見たい。乳がくく張るわいの」

と身をふるはせ駆け入らんにも関の戸に、空音もならず羽抜鳥。親は外面に血の涙。子はやすかたの安からぬ。悲しさ迫る内と外。一度に『わつ』と湧き出づる涙。浪花江泉川、小きんを汲み出すごとくな

り。半七は齒を喰ひ締め

「かばかり深き御情け、是非もなやもつたいなや。不孝を赦させ給はれかし。いつまで泣いても返らぬ繰り言。親父様の御繩目、はやうほどくは身の最期。イザく急がん。さあおぢや」

と立上りしが『今生の別れにせめて御顔を』と、差覗けば、三勝も、『お通を一目』と伸び上り見れども親子へだての関。なんと千万無量の思ひ。両手を合はせ伏し拝み

「おさらば」
「さらば」

と云ふ声も歎きにうづむわが家の内、見返り、見返り死に往く。大和五条の茜染め、いま色上げし艷容。その三勝が言の葉をくくに、写して止めけれ

かなでほんちゆうしんぐら
仮名手本忠臣蔵

〔解説〕

寛延元年（一七四八）大坂竹本座にて初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳の合作です。『菅原伝授手習鑑』
『義経千本桜』とともに三大浄瑠璃の一つに数えられます。

当時の幕府の検検閲から逃れるため時代を足利時代に置き換え、登場人物の名前も、浅野内匠頭を塩治判官、
吉良上野介を高師直、大石内蔵助を大星由良之助に変えています。

〔あらすじ〕

京の祇園に身売りをしたお軽を見送った勘平のもとに舅・与市兵衛が遺体となって戻ってきます。おりしも仇
討ちの同士が到着、勘平が持っていた縞の財布から、舅殺害は勘平の仕業と責められ、勘平は切腹。しかし遺体
の傷が鉄砲傷ではないことから、斧定九郎の仕業と誤解が解けます。勘平は仇討ちの同士として連判状に名を連
ね、血判を押して息絶えます。

勘平腹切の段

通り座に着けば。二人が前に両手を付き

「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、申し開かん詞もなし。何卒某が科御許しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に、御両所の御取り成し、偏へに頼み奉る」

と、身をへり下り述べければ。郷右衛門取りあへず「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として、多くの金子御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせしその方の金子を以て、御石碑料に用ひられんは、御尊靈の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ金子は封の儘相戻さるゝ」

と、詞の中より弥五郎懐中より金取り出だし、勘平

が前に差し置けば、『ハツ』とばかりに気も顛倒、てんどう母は涙と諸共に

「コリヤこゝな悪人面、今といふ今、親の罰思ひ知つたか。ハイ、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年寄つて後生の事は思はず、婿の為に娘を売り、金調へて戻らしやるを待ち伏せして、ア、アレあの様に殺して取つた金ぢやもの、天道様がなくば知らず、何で御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当てゝ下されぬは、神や仏も聞こえませぬ。あの不孝者、御前方の手に掛けて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つわいの」

と、身を投げ伏して泣きあたる。聞くに驚き兩人刀追つ取つて弓手馬手に詰め掛け詰め掛け、弥五郎声を荒らげ

「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよ

とは言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳にも入るまい、親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は大身槍の田楽刺し、拙者が手料理振舞はん」と、はつたと睨めば郷右衛門

「渴しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて、調へたる金と推察あつて、突き戻されたる由良助殿の眼力、ハ、天晴れ〜。さりながら、ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判官の家来早野勘平、非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こなこな、〜、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御身はどうしたものだ。左程の事の弁へなき、汝にてはなかりしが、いかなる天魔が魅入り

し」

と、鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば、堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を、抜くより早く腹へぐつと突き立て

「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあらば一通り申し開かん、兩人共にまづ、〜、聞いてたべ。夜前弥五郎殿の御目に掛かり、別れて帰る暗紛れ、山越す猪に出合ひ、二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探り見れば、猪にはあらで旅人、南無三宝誤つたり。菓はなきかと懷中を探し見れば、財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども、天より我に与ふる金とすぐに馳せ行き、弥五郎殿にかの金を渡し、立ち帰つて様子を聞けば、撃ち止めたるは、撃ち止めたるは、わが舅。金は女房を売つた金、か程迄する事なす事、

いすかの嘴程違ふといふも、武運に尽きたる勘平が、
身の成り行き推量あれ」

と、血走る眼に無念の涙。子細を聞くより弥五郎ず
んど立ち上り、死骸引き上げ打返し、『ムウ、ム』
と疵口改め

「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれども
これは刀で抉つた疵。勘平早まりし」

と、言ふに手負も見てびつくり、母も驚くばかりな
り。郷右衛門心付き

「イヤコレ千崎殿、ア、これにて思ひ当つたり。御
自分も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けた
る旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親
九太夫さへ、見限つて勘当したる悪党者。身の佇み
なき故に、山賊すると聞いたるが、疑ひもなく勘平
が、舅を討つたは彼奴が業」

「エ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者
でござりますか。ハア」

『ハツ』と母は手負に縋り

「コレ、手を合はして拝んます。年寄りの愚痴な心
から恨み言ふたは皆誤り、堪へて下され勘平殿、必
ず死んで下さるな」

と泣き詫ぶれば、顔振り上げ

「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを
冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を
伴はん」

と、突込む刀引廻せば

「ア、暫く。思はずもその方が舅の敵討つたる
は、未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みに
て、一功立つたる勘平、息のあるうち郷右衛門が、
密かに見する物あり」

と、懐中より一卷を取り出だし、さらさらと押し開き

「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し、一味徒党の連判かくの如し」

と、読みも終らず苦痛の勘平

「シテその姓名は、誰々なるぞ」

「オ、徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、その方を差し加へ一味の義士四十六人。これを冥途の土産にせよ」

と、懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し

「勘平、血判」

「オ、心得たり」

と、腹十文字に掻き切り、臓腑を掴んでしつかと押し

「サ血判、仕つた」

「ア、コリヤ乗るな、く。早野勘平繁氏、確かに血判相済んだぞ」

「チエ、忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」

と、言ふに母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差し出だし

「勘平殿の魂の入つたこの財布、婿殿ぢやと思つて敵討の御供に連れてござつて下さりませ」

「オ、成程、尤もなり」

と、郷右衛門金取り納め

「思へば、この金は、縞の財布の紫摩黄金しま、仏果を得よ」

と言ひければ

「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬ死なぬ。魂魄この

土に留まつて、敵討ちの御供する」

と、言ふ声も早四苦八苦、『惜しや不憫』と兩人が、浮む涙の玉の緒も、切れてはかなくなりにつけり

「ヤアく、く、もう婿殿は死なしやつたか。さてもく世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ婿を先立て、いとし可愛いの娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つてこれがマア、何と生きてゐられうぞ。コレ親仁殿、与市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」

と、取り付いては泣き叫び、また立ち上つて

「ア、コレ婿殿、母も共に」

と、継り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは『わつ』とばかりにどうど伏し、声をはかりに嘆きしは、目も当てられぬ次第なり。郷右衛門突立

ち上がり

「これく老母、嘆かるゝは理りなれども、勘平が最期の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡しせば満足あらん。首に掛けたるこの金は、婿と舅のななぬか七七日。四十九日や五十両、合はせて百両百ケ日の追善供養、後懇ろに弔はれよ。さらば、さらば」

「おさらば」

と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立ち帰る、人もはかなき次第なり

日高川入相花王

〔解 説〕

宝暦九年（一七五九）大阪竹本座初演。竹田小出雲、近松半二、北窓俊一、竹本三郎兵衛、二歩堂の合作。

〔あらすじ〕

病弱な朱雀天皇は、弟の桜木親王に帝位を譲ろうとしたため、親王は左大臣藤原忠文に迫害を受けることとなります。忠文側の追っ手を逃れ、親王は、山伏安珍（あんちん）となり、紀州の真那古庄司（まなこのしょうじ）のもとにやってきました。庄司の娘清姫（きよひめ）は、かつて都で親王を見初め、恋心を抱いていました。しかし親王には、おだ巻姫という恋人がおり、二人は、忠文の一味、鹿瀬十太（かせのじゅうた）の手を逃れ、道成寺へと向かいます。清姫は僧、剛寂（ごうじやく）にたきつけられ、嫉妬のあまり逆上して二人の後を追います。日高川にたどりついた清姫は、渡し守に舟を出すように頼みますが、渡し守が拒むと、その姿は蛇体に変化し、川を渡っていくのでした。

渡し場の段

こゝは紀の国日高川、清き流れも清姫が、松吹く
風に誘はれて、只さへいと物凄し。女心の一筋に
脛はぎもあらはにやうくと、日高の川をここかしこ

「安珍さまいなうと、わが夫なう」

と駆け廻り、呼べど叫べど松風の他に答ゆるものも
なし。はや山の端にさし昇る隈なき夜半の月影は、
昼を欺く如くなり。かすかに見ゆる川岸の、もやひ
し舟に

「ハア嬉しや、ここは日高の渡し場、これを越ゆれ
ば道成寺へ間もなし、渡り頼まん急がん」

と川の汀みぎわに立ち寄って

「なうその舟早う渡してたべ、渡し守どのくいな
う、コレなうと」

と呼ぶ声も枯野の秋の舟ならで、渡りかねるぞ甲斐
もなき。寝耳とまにふつと舟長は苦押しとまのけて仏頂面

「エ、何ぢや、暄やかましいわい。夜夜中がやくと、『早
うと』のその声で、あつたら夢を取り逃がしたわ
い。夜が明けたら渡してやらう、エ、コレマアよう
寝ている者を、あた鈍くさい」

とつかうどに顔をしかめてつぶやけば

「なう自らは道成寺へ急ぐ者、早うこゝを渡してた
べ、サ早うと」

「エエ何ぢや、鱈とじょう汁が食ひたい、アハ、ハ、ハ、テ
モいやしい奴ぢやなあ、ハ、ア聞えた、コリヤ何ぢ
やな、宵に渡した山伏殿の後追うてきた女子ぢやな、
エ、それなればなほ渡されぬ、ならぬと」
にべもなき、詞に姫は涙声

「エ、そりや胴欲ぢやと、わいなう。親の許し

たわが夫を他所の女子に寝取られて、何とこの儘帰
られう、不憫と思つて渡してたべ、慈悲ぢや情ぢや、
聞き分けて」

と頼みつかこちつ手を合わせ、嘆き沈むぞ哀れなり。
こなたはなほも空吹く風

「ム、それほどに頼むなら渡してやらう、と言つた
らよからうが、マアいやぢや。おりやあの山状に縁
もなし、また由縁ゆかりもなければ、渡されぬといふ訳を
耳をさらへてマよう聞けよ。かの山状殿の頼みには
『かう／＼した女が来たら必ず渡してくれるな』と
コレ、小金貫こまがねふて頼まれた。寒気をしのぐ山吹の八
重か一重か板一枚、下は地獄のこの商売みすぎ、頼まれた
れば男づく、いつかな渡さぬ、マアならぬ。われも
またどれほどに焦がれても及ばぬ恋ぢや、役にも立
たぬ顎きかずと、足元の明るい内とつとと去ね／＼。

エ、うぢ／＼とうぢついて棹の馳走を食らふか」
と慈悲も情けもなか／＼に渡す気色もなかりける。
姫はあるにもあらればこそ

「エ、聞こえませぬ／＼安珍さま。恨みはこつちに
あるものを、却つてこの身に恥かかされ、何と永ら
へぬられうぞいなう。今日とても父上の御意見、ご
もつともとは思へども、女は一度わが夫と思ひこん
だらいかなこと、例へ地獄へ落ちるとも可愛いとい
う輪廻は離れず、まして五月の宮詣でにふつと見染
めしその日より、愛し床しい恋しいと夢現うつつにも忘れ
かね、焦れ焦るゝ恋人に逢ふて嬉しい言の葉を、語
らふ問さへ情なや。恋の呵責に碎かれて身は煩惱に
繋がるゝ、紅蓮ぐれんの氷、大焦熱、阿鼻修羅地獄へ落つ
るとも、思ひ切られぬ安珍さま、聞えぬわいな」
と身をもだへ『わつ』とばかりに声を上げ、嘆く涙

の雨車軸、その名も高き紀の国や、日高の川に水増して堤も穿つごとくなり、泣く目も払ひすつくと立ち

ち
「エ、妬ねたましや腹立ちや、思ふ男を寝取られし恨みは誰に報ふべき、例へこの身は川水の底の藻屑となるとても、憎しと思ふ一念のやはか晴らさで置くべきか」

と心を定め身繕ひ、川辺に立ちより水の面写す姿は大蛇の有様。舟長見るよりわな々き声

「鬼になった、蛇になった、角が生えた、毛が生えた、食殺されては叶はじ」

と跡をも見ずして一散に、飛ぶが如くに逃げてゆく
「さては恠気嫉妬の執着心、邪心執念いやまさり、
我は蛇体となりしよな。もはや添はれぬこの身の上、

無間奈落へ沈まば沈め、恨みを言ふて言い破り、取り殺さいでおかうか」

と怒りのまなじりの眦、齒を嚙み鳴らし、あたりを睨んで火焰を吹き岸の蛇籠もどうく〜と青みきつたる水面、ざんぶとこそは飛び入ったり。不思議や立浪逆巻きて、憤怒の大頭角振立て、髪も逆立て浪がしら、抜手をきって渡りしは怪しかりける

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。